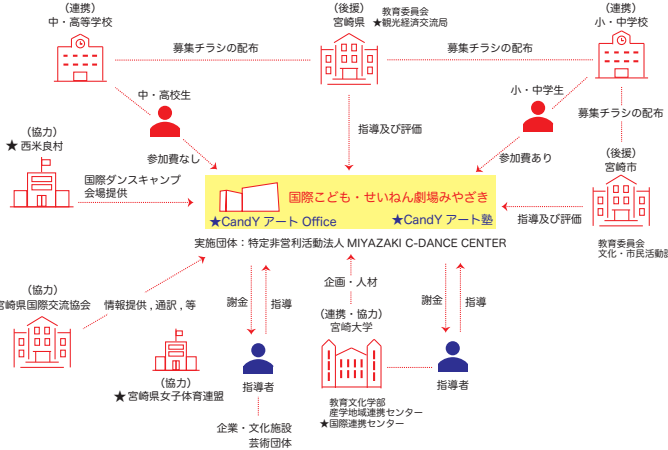


# 成果報告書

(地域文化倶楽部創設支援事業)

特定非営利活動法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER

所在地	宮崎県宮崎市	設立年	2008年
運営主体	特定非営利活動法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER		
事業目標	<p>令和5年度からの学校部活動の段階的な地域移行に向けて、以下に示す二つの観点から、2つのコースの4つのモデル(詳細は「活動概要」を参照してください。)について実践研究する。</p> <p>観点① 児童生徒が、質の高い文化芸術に親しめるような、継続的な機会の創出          観点② 自主的・主体的に次代を担う児童生徒の文化芸術活動の支援</p> <p>本事業の成果としては、以下のことを期待している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動の教育的意義が地域移行により変化しない。</li> <li>・変化したとしてもより児童生徒が自主的・主体的に選択・参加する部活動になる。</li> <li>・教員の負担・負担感の軽減(教員の働き方改革)の観点から、文化部活動の目的・意義・役割等を再検討する学校や段階的な地域移行のための環境整備に着手する学校が徐々に増えていこう。</li> </ul>		
きっかけ	<p>○平成31年3月に、地域の認可保育園の協力の下、申請団体の拠点となる「国際こども・せいねん劇場みやざき」をオープンさせたこと。また、そのオープンから2年が経過する中で、劇場の存在とその目的(子供と青年に特化したアート空間)が、子供たちだけでなく広く地域に認知されるようになったこと(例:「国文祭・芸文祭みやざき2020」分野別フェスティバル「小さなアートフェスティバル」の会場)。</p> <p>○児童生徒が文化芸術を自分事として捉える好機となるはずだった「国文祭・芸文祭みやざき2020」が、コロナ禍の影響で1年延期されたこと。</p> <p>○宮崎県内の高等学校には、種々のダンスを取り扱う部活動があり、県内外のコンクールやフェスティバル(例えば、高文祭)に出場・出演する等、活発に活動をしている。一方、県内の中学校に指導者がいないこともあり、ダンス部はないに等しい。そのため、「中学校にダンス部があれば入りたかった」(中学生)や、「進学先の中学校にダンス部を作って欲しい」(小学生)といった声が聞こえてくる。また、誰もが入部できるダンス部が中学校にないことから、ダンススタジオ(有料)に通ってダンスを楽しむ児童生徒も多い。その一方で、経済的な理由で通えない児童生徒もいる。この児童生徒の貧困による格差とその是正も解決すべき課題となっていた。</p> <p>○文化政策がご専門の長嶋由紀子氏(東京大学人文社会系研究科研究員)から、本事業を紹介され、応募を勧めていただいたこと。</p>		
団体・組織等の連携	 <p>宮崎市(教育委員会、文化・市民活動課、子ども未来局): 指導及び評価、市民への広報          宮崎県(教育委員会、★観光経済交流局): 指導及び評価、広報          宮崎大学(教育文化学部、産学地域連携センター、★国際連携センター): 企画協力          西米良村(★教育委員会): 「国際ダンスキャンプ」の協力          ★宮崎県女子体育連盟: 「pre国際アーツフェスティバル」の協力          ★宮崎県国際交流協会: 「国際ダンスキャンプ」「pre国際アーツフェスティバル」の協力          ※コロナ禍の影響下、計画していた「国際」の付く活動(★の団体・組織との連携)は中止。</p>		
活動場所	<p>国際こども・せいねん劇場みやざき(愛称: CandY)          「CandY」(Children and Youth)は、屋は隣接する保育園の園児が走り回る体育館、夜と週末にはコンテンポラリーダンスなどの芸術鑑賞の劇場となる。空間活用とアート教育、地域の保育支援、アーティスト育成といったいくつもの顔と役割を持ち、芸術に触れる機会や場が少ない子供や地域住民、そしてアーティストにも開かれた「場」である。</p>		

## 活動概要

### ●Aコース CandYアート塾 対象:小・中学生

内容:小集団で、協働して、新たな価値を生み出す活動(芸術表現)を体験する。

モデル① メンバー固定の「定期講座」(クール型)、10回/クール、2,000円/回、10名程度

モデル② 「こどもCantレ」(90分完結型)全20回 ※GW・夏休み・冬休み等で実施する。  
1,000円/回、10名程度/回

達成目標:参加者数は募集人数の80%、リピーター数は参加者数の50%

【目標の達成状況】(定量的観点)コロナ禍の影響下、実施回数を減らして実施した(計20回)。募集人数に占める参加者数は88%。参加者数に占めるリピーター数は46%。※目標値には達していないが、これは回数を減らしたり、初参加者を優先したりしたためである。(定性的観点)「いろいろな体験ができた」「どれも自由感がある」「よいきっかけになった」

【事業計画書との差異】特に、コロナ禍の影響の下、変更を余儀なくされた計画

- ・ モデル①とモデル②を分けずに、感染者数の動向を見ながら、不定期に実施した。
- ・ 参加料として1回1,000円を徴収した。

### ●Bコース CandYアートoffice 対象:中学生～

内容:アートイベントの企画・運営を体験する活動

モデル③ 「国際ダンスキャンプ」の運営、8月中の3日間程度、費用負担なし、5名程度

モデル④ 「pre国際アーツフェスティバル」の企画・運営、5月～翌年2月、月に1回程度、費用負担なし、5名程度

達成目標:活動前後の参加者に意識が変容する(参加者の90パーセント)

【目標の達成状況】(定量的観点)オンラインのアート会議及び講義(計14回)の参加者(1～10名/回)を対象にしたふりかえりのインタビューでは、活動の前後に何かしらの意識変容が起きたと回答した参加者の割合は70%。(定性的観点)「学校ではやれない体験ができた」「それなりにいい写真が撮れた」

【事業計画書との差異】特に、コロナ禍の影響の下、変更を余儀なくされた計画

- ・ 「国際」と付く活動の中止。
- ・ 県教育委員会の指導の下、部活動中止及び個人の活動に制限された期間の活動を中止
- ・ 個々のリスクに配慮した活動(国文祭みやざき2020分野別フェスティバル)への参加
- ・ 延期していた講義の再開(まん延防止等重点措置の解除された3月6日)



Aコース(CandYアート塾)の様子



Bコース(CandYアートoffice)の様子

## ○本事業による成果

「教員の負担軽減に寄与できているか。(従来の学校部活動と比較して従事時間がどう変化したか)」について。Bコースが該当する。担当教員にお願いしたのは、本団体との日程調整が主で、全てメールまたは電話で行った。よって負担軽減に寄与することができた。なお、本団体は、文化部活動の地域移行により、教員には、本団体及び参加者とこまめに連絡を取り合い、学校や参加者が期待した活動になっているかの観点から助言をお願いしたり、保護者も参加する活動成果の発表会・報告会等での講評・評価をお願いしたいと考えている。

「学校全体としてどのように変化が生じたか。(良くなった点、悪くなった点)」について。コロナ禍の影響で、計画していた活動ができなかったこともあり、学校全体に変化を生じさせることはできなかった。

「アンケート、ヒアリング等の結果など。」及び「学校の部活動との関係性について。(将来、部活動に代わり得る活動として実施していけるか)」について。以下の通りです。

本県の文化活動の関係者(学校長、教員、子供、保護者、地域の人々等)の地域文化倶楽部への理解が向上するような地域文化倶楽部のモデルづくりを目的に、児童生徒が保護者の同意を得て参加するAコース(モデルA)と、学校(今年度は県立五ヶ瀬中等教育学校)と連携・協力して実施するBコース(モデルB)を実践研究した。その結果、参加者や保護者に対する学校の責任の範囲で実施することが前提のモデルBは、特に今年度については、コロナ禍による部活動の休止や学級閉鎖等により、工夫の余地がないに等しかった。一方、モデルAは、保護者と協働しながら、コロナ禍にあっても、内容や方法を工夫したり計画を変更したりして活動を実施することができた。以上のことから、モデルAならば、本団体のような地域のアートNPO法人が、部活動に変わり得る活動として実施していけるのではないかとわかった(得られた成果)。

【その他の成果】(定性的観点)

●Aコース:参加者とその保護者を対象に実施したアンケート調査から、定期が不定期になったことや回数が減ったこと、内容の変更(美的創造的体験→メタバース体験)について、コロナ禍で継続するための臨機応変な対応だったと高く評価していたことがわかった。また、回答した保護者の全員が、子供のAコースへの参加を、塾や習いごとに優先させていたことがわかった。

●Bコース:「期待していたような活動ができなかった」「コロナ禍を理由に積極的・主体的に参加しようとしなかった」(参加者のインタビュー)から、先の見えないコロナ禍で、参加者主導で本事業を実施する難しさがわかった(次年度の課題)。その一方で、「国文祭りやざき2020分野別フェスティバル」の制作に係わった参加者は、「アーティストへの意識」や「接客意識」が変化したと回答。本事業に参加したことをプラスに捉えていた。

※3月6日のまん延防止等重点措置の解除後に、Aコースについては、2~3回の実施を計画し、改めてアンケート調査を実施する。その結果と併せて本事業の成果と課題を第四回検討・運営委員会(実施は次年度の4月後半を予定)に報告し評価を仰ぐ。同じく、活動報告書の作成と、NPOのHPへのアップについても年度をまたいで行う。

※Bコースについては、長嶋由紀子氏(前出)のご指導の下、アンケートの集計・分析・考察を行う計画であったが、コロナ禍の影響下でアンケート調査を実施できず、参加者へのインタビューのみとなった。

## ○児童・生徒への指導に関する工夫

「生徒たちが満足する指導ができているか。(他の学校部活動と同等以上の指導内容となっているか)」について。Aコースはリピート希望者が多かった(実際は回数を減らしたり、初参加者を優先したりしたため、ニーズに応えることができなかった。)ことから、参加者の満足度は高いと言える。ただし、学校部活動(小学校はクラブ)と同等以上の指導内容となっているかは、県下に比較対象(同様の部活動・クラブ)がないため言及できない。

「技術指導以外の周辺知識(楽器のメンテナンス方法等)の指導も行っている等)」について。A・Bコースとも、代替案の「メタバース体験活動」では、メタバースの貸し出し及び取り扱いの指導も行っている。

「指導のための研修制度(技術的、精神的)があるか。」については、今後の講師候補者に対し、活動を参与観察したり、補助者として実際に活動に参加できる場を設けている。

「芸術系大学等との連携(生徒のモチベーションアップ)は図れているのか。」について。本県に芸術系大学等はない。ただし、本申請団体は国内外で活動するアーティスト(振付家)が立ち上げたアートNPO法人であり、毎年、国内の美術館と協働していることから、生徒のモチベーションアップは図られている。今年度は、坂本善三美術館(熊本県小国町)と森美術館と協働した内容も参加者と共有した。3月に京都市立銅駝美術工芸高校と森美術館と協働した内容も共有する予定である。

## ○運営上の工夫

「指導者の養成・質・量の確保について(どのように、誰が、いつ)」について。今年度は、教職大学院(教育学・美術科教育・情報教育)を修了した本団体のスタッフ3名と舞踊教育の専門家が指導者となった。なお、このスタッフ3名は、国内外で活動する振付家であり、文化庁の「芸術家の派遣事業」の派遣講師として県内外の学校・教員と協働している。

「活動時間等の在り方等について(ガイドラインの活用等)」について。Aコースについては、土・日曜日及び夏季・冬季休業中に実施し、1回の活動時間を90分に設定した。参加者・保護者を対象としたアンケート調査においても、保護者は全員が「ちょうどよい」と回答していたが、参加者の数名が「短い」と回答していた(要検討事項)。

「生徒たちの募集について(どのように、誰が、いつ)」について。Aコースは、本団体のHPやSNS等を活用して参加者を募集した。Bコースは、自校(県立五ヶ瀬中等教育学校)で実施したいと手を挙げた生徒(本団体の活動に参加したことのある6年生/複数)が、本事業に理解を示した教員の指導の下、全校に呼びかけて参加者を募った。

「地域、保護者、教育機関等との連絡調整について」について。主に本団体のHPとSNSを活用した。

「コーディネーター・ファシリテーター等の役割を担う人材育成は図れているか。」について。文化庁の「芸術家派遣事業」と兼ねて本団体のスタッフ(アーティストを除く)を対象にコーディネーターの育成を図っている。ファシリテーターの育成については、本団体のスタッフ全員が教員免許状を有しているため現時点では考えていない。

「民間企業とのタイアップ等について」について。本団体の活動に興味・関心のある小児科医(地域医療のリーダー)に、今年度の本事業の成果と今後のタイアップ等についてプレゼンすることができた。

「用具(楽器等)調達、運搬、保管について」について。用具は本団体の別事業で使用したものを兼用している。運搬・保管についても、本団体の事業に位置付けている。

「活動支援・事業運営のためにICTを活用しているか。」について。積極的に活用している。

「関係者全員にとって無理のない仕組みを構築しているか。」について。今年度は、コロナ禍の影響で海外での公演活動が中止・延期となったことが幸いしたが、本格始動させるためには、無理のない仕組みの構築は必須である(要検討事項)。

## ○継続的な運営に関する課題・展望

「自治体、地域民間企業等との連携協力体制の構築ができていくか。(今後、構築可能になるか)」について。宮崎市(本団体が拠点とする自治体)の公立学校(特に、中学校)が地域文化倶楽部を導入することになり、地域の中学校や生徒から求められた場合は、本団体から自治体に連携協力体制の構築を提案させていただく予定である。それまではモデルAを継続実施し、得られた成果を自治体へ報告する。

「人材確保のために教育委員会、地域、団体等の連携が図れているか。」について。宮崎市(本団体が拠点とする自治体)の公立学校(特に、中学校)が、地域文化倶楽部を導入することになり、地域の中学校や生徒から求められた場合は、本団体から地域の教育委員会に対し、人材確保のための連携について提案させていただく。それまではモデルAを継続実施し、得られた成果を地域の教育委員会等へ報告する。

「会費徴収に関して保護者・学校等の理解が得られているか。(今後、どのように理解を得ていくか)」について。モデルAは保護者の同意を必要としたこともあり、会費徴収に対する保護者の理解は得やすかった。一方のモデルBは、計画当初から会費徴収について学校・保護者の理解を得ることを想定していなかった。継続実施することになれば、先行している事例(例えば、総合型スポーツ倶楽部の会費徴収の金額等)を参考に、自治体、地域の教育委員会に指導していただきながら、保護者・学校等の理解を得る手立てを探っていくたい。

「民間の文化芸術団体等との連携は図れているか。」について。本事業を継続的に実施することになれば、自治体にお願ひし、本事業に興味関心を示している民間の文化芸術団体を教えていただき、連携協力を呼びかける。

「人材バンク等の活用は図れているか。」について。本事業を継続的・計画的に実施することになれば、積極的な活用を検討する。

「自治体等の補助金制度、民間の基金等の活用。(単年度ではなく、継続的・定期的な)」について。本事業の継続実施を想定し、継続的・定期的な補助金制度や基金等があるかをネットで検索している。また、自治体に対しては該当する情報があれば教えていただきたいとお願いしている。

「会費の徴収について。(金額は妥当か)」について。本年度は回数及び時間を鑑み、妥当と思われる会費を設定・実施した。Aコースについては、回数を確保できないことや県外活動を中止したことから、募集で示した会費を半額にして徴収した。その結果、アンケート(参加者)の中には「安い」という回答もあり、今年度の金額設定は妥当だったと捉えている。

「保険(公益財団法人スポーツ安全協会等)への加入を必須としているか。」について。当法人に関わるイベントに対して一括契約をしている。本事業を継続的に実施することになれば、より保障が充実した保険の加入を検討したい。

「減免措置のあるホール等(場所)を利用している等。」について。本団体が運営を任されている、専用かつ安価に利用できる劇場(所有は認可保育園)があるため、継続実施する場合も、減免措置のあるホール等の利用は想定していない。

「クラウドファンディング活用による資金調達等。」について。これまでに活用した経験から、自治体等の補助金制度、民間の基金等の活用ができない場合のみ活用する。

○令和5年度からの学校部活動の段階的な地域移行に関する方針・計画

「学校でも最先端(デジタル)技術の活用が進められている中で、学校教員の意識・意欲やスキル、仕事効率の問題などもあるが、より深刻なのは、日々の授業をしっかり準備できる余力がないという問題である」(引用:妹尾昌俊氏『教師崩壊』)とあるように、教員の働き方改革が進んでいる。一方、次代を生きる子どもたちのニーズを考えると、学校・教員も新しい(最先端の文化芸術を取り扱う)部活動を用意しないといけなくなるだろう。日々の授業の準備で余力がない教員にとって、こうした新しい部活動は負担・負担感増となる。令和5年度までに、本団体が拠点とする自治体(宮崎市)の公立学校(特に中学校)が、地域文化倶楽部の導入を決定し、さらに児童生徒から最先端の部活動(今年度のメタバースクラブ的な活動)を求めた場合は、児童生徒のニーズに沿うような部活動を本団体が立ち上げて受け入れる。ただし、それは教員の負担・負担感減にはならないが、負担・負担感増にもならない。その際は、宮崎市や地域の教育委員会と、予算化も含めて、パートナーシップを組ませていただく。

一方、既存の学校部活動の段階的な地域移行については、自治体等の補助金制度が整備されたり、民間の基金等の活用を図ることができるならば、地域の教育委員会、保護者・学校と相談しながら本格実施に向けた移行を図る。

<p><b>募集方法</b></p>	<p>本団体のHP・SNSに掲載、過去のイベント参加者へのダイレクトメール 実施会場(劇場)エントランスへのチラシ掲示、近隣の学校や近接市町村の「芸術家の派遣事業」(文化庁)実施校へのチラシ配布及び送付。</p>
<p><b>指導者</b></p>	<p>教職大学院(教育学・美術科教育・情報教育)を修了した本団体のスタッフ3名と舞踊教育の専門家(大学客員教授)の計4名</p>
<p><b>移動手段</b></p>	<p>保護者による送迎(小学生・中学生) 公共交通機関の利用、及び自転車・徒歩(中学生・高校生)</p>
<p><b>活動費用</b></p>	<p>【CandYアート塾(1回完結)】1,000円×20回 【CandYアートoffice(継続)】参加費なし 旅費(実費支給)</p>
<p><b>スケジュール</b></p>	<p>【CandYアート塾(1回完結)】 6月25日(土)/26日(日) 7月1日(土)/2日(日)/22日(木) ★10月30日(土)/31日(日) ★11月3日(水・祝)、12月28日(火)/29日(水)/30日(木) 1月8日(土)/23日(日) 2月5日(土)/★13日(土)、★3月5日(土) 計20回 ※★は、午前・午後に分け2回実施。 【CandYアートoffice(継続)】 4月4日(日)、★7月18日(日)、☆8月11日(水)/★26日(木) ★9月5日(日)/★15日(水)/★27日(日) ★10月6日(水)/16日(土)、★12月12日(日)/28日(火)/29日(水)/30日(木)、 3月6日(日) 計14回 ※★は、オンラインを活用。☆は、オンラインと対面を活用。</p>
<p><b>保険加入等</b></p>	<p>普通傷害保険 契約種別:レクリエーション 被保険者数 600名 ※当法人に関わるイベントに対して一括契約をしているため、本事業での保険料計上はなし</p>

## Aコース 『CandY アート塾』



## Bコース 『CandY アート office』

